令和４年２月号

川越セントノア病院　〒350-1155 埼玉県川越市下赤坂２９０－２
TEL049-238-1160　FAX049-238-1162　https://www.saintnoah-kawagoe.jp

福ノアの爽風（かぜ）

～目次～

- 病院短信『生きがい』　長山　あや
- 看護日誌　中澤　優
- 日常の一コマ　堀江　寛子
- 作業療法科だより　寺崎　竜也

２月の予定

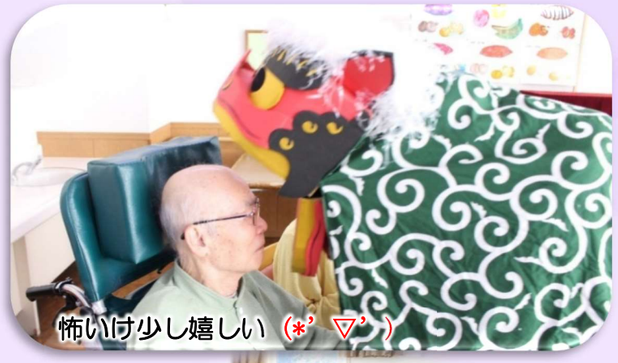
◆誕生日会　各病棟にて

◆節分　各病棟にて

獅子舞

今年も獅子舞がやってきました。
一年の健康と幸せを願い、患者さんの頭をガブリガブリ。

患者さんもおっかなびっくり❣
ガブガブ噛まれていました！(^^)！



怖いけ少し嬉しい（*’▽’）

職員による獅子舞❣　見事でしたね(*^^)v
患者さんから大歓声が上がっていました❣

無病息災❣　良い年でありますように
(*^_^*)

看護日誌

1病棟看護師　中澤　優

新型コロナウイルスが流行して２年が経とうとしています。それに加え新型コロナの新たな変異ウイルスのオミクロン株をめぐっては、クラスターが発生するなど各地で感染が広がっています。当院では先日新型コロナウイルスワクチンの３回目の接種が完了しました。ワクチンに加え経口薬も認可され始めましたが、患者さんに感染させないためにも我々にできる事は、先ずマスクの正しい着用とこまめな手洗い等の基本的な感染対策に加え、睡眠、食事をしっかり摂って免疫を高めてコロナウイルスに罹らないよう努めてまいります。

病院短信

『生きがい』

3病棟看護師長　長山　あや

暦の上では立春を迎え春が始まりますが、まだまだ寒さが厳しい日々が続いています。コロナウイルス感染による張りつめた緊張感から、少しずつ訪れる春と共に解放され、ホッと一息つける事が出来る日々が来ることを願います。

病棟内では、世間の緊張感とは違い、今まで通り患者さんの思い思いの時間が流れています。そんな中で、「今までのような生きがいが無いわ」と話される方がいらっしゃいました。生きがいとは「人の生を鼓舞し、その人の人生を根拠づけるもの」とあります。生きる張り合いや、幸せや喜びを感じ生きる原動力となるものだと思います。ＱＯＬを保ち、高めるためにも生きがいは必要です。

患者さんと話をしていると、結婚してから主人や子供の世話だけをしてきた。朝から晩までほとんどの時間を台所で過ごした。家の仕事を朝から晩まで手伝っていた。孫の面倒を見て泣いてばかりで大変だったけど、成長していく姿がただただ嬉しかった。家族のために必死になって仕事した。等々笑顔で話してくださいます。家族と共に過ごした時間が生きがいだったのだろうなと思いました。家族や社会的な立場を離れた今、院内の限られた中で以前のような生きがいを感じてもらう事は難しいですが、この場にいて楽しい、嬉しいと少しでも感じてもらえるように援助していきたいと思います。面会制限が続きご心配が尽きないと思いますが、スタッフ一同患者さん一人一人に気を配り、寄り添った援助をしています。気を緩めず引き続き体調管理に十分気を付けていきたいと思います。

作業療法科だより

作業療法士　　寺崎　竜也

令和４年を迎え、お茶会を行いました。思い思いのお着物を選んでいただき、髪飾りもつけて準備万端です。お茶会が始まると、和やかな雰囲気で会話が弾みます。「お菓子は先に頂くのよ。」「とても美味しいわ。」と声が聞こえます。茶道経験が長い方は、普段の柔和な表情とは一変し、手にした茶筅（ちゃせん）を目にも止まらぬ速さで動かし続けています。その動作は皆様に動画でお見せしたいほどです。きれいにきめ細かい泡が立ち、何ともまろやかなお味です。

おめかしをして、美味しいお茶とお菓子を囲み、楽しいお話に花が咲き、笑い声が聞こえる、まるで女子会のような楽しいひとときを過ごしました。

今後とも感染対策を徹底しながら、魅力ある活動を提供していきたいと思います。

日常の一コマ

清三郎さんは群馬県にて６人兄弟の５番目に生まれ、少年時代はとても真面目な優等生で、お姉さん達からも大事にされたそうです。

高校卒業後に東京の銀行に就職、奥様とも知り合われ、職場結婚。二人のお子さんにもめぐまれました。そして職場では辣腕を振るわれ、センター長まで勤め上げ、６７歳で退職をされたそうです。その頃より徐々に不眠になったり、字を読めなくなるなどの症状が出始め、とても忙しく仕事をされてきたそのストレスの後遺症かと思い、近くの病院を受診するようになったそうです。その症状は段々顕著になり再度受診、その結果は『前頭側頭型認知症』＝この認知症は比較的若いうち（５０から６０歳代が多い）に発症することが多く、前頭葉は理性や社会性、側頭葉は記憶や言語が正常に機能しなくなる特徴がある＝と診断されました。

平成２７年、身体拘束のない病院に、とのご家族のご希望で当院にご入院されました。入院当初は排せつの介助を拒否したり、徘徊は頻繁で、他の患者さんの部屋への侵入は日常茶飯事、かなり手が掛かりましたが、その一方で、奥さまとの面会時は手をつなぎ、ハンチング帽をかぶり、オシャレをして、とても嬉しそうで、しかも紳士的な一面も持っていました。

７年経った今ではすっかり落ち着きましたが、残念なことに現在では車椅子での生活（これも前頭側頭型認知症の特徴ですが、ADL が徐々に低下していきます）となってしまい、日中でも目を閉じていることが多くなりました。そんな清三郎さんですが、食事は毎食しっかり召し上がり、コロナ禍で頻度は減ってしまいましたが奥様とのご面会もあり、元気いっぱいの昨今です。又、ご家族の事を思い出されているのか、夜間、はっきりと目を開けて、素敵な笑顔を見せてくれる時もあります。

（３病棟看護主任　堀江　寛子）

編集後記

清三郎さんの「一コマ」掲載の許可を得るお話をした時に、奥さまから「家族中で喜んでいます。本当ですか？」とおっしゃって下さり、また息子さんからもメールを頂きました。その一部ですが、ご紹介させてください。

「とても家族思いで優しく、スポーツも出来る自慢の父です。職場が大変だった事と、真面目な気質が混ざり合って今のような状況になってしまったのかも知れません。しかし父は今も幸せなのだと思います。それは月に一回程度の面会でも感じられることです。病院の皆さんはとても良くしてくださり、父は幸せな時間を過ごせていると思います。」

これからも清三郎さんがお元気で、豊かな時間を過ごせていけるようスタッフ一同応援をしていきたいと思います。

（ホスピタルライフマネージャー　宇治原　啓子）